

5. 個人感想



訪問を重ねての感想

英語コース4年 小野僚大

私と古井戸は合宿以前にも下見として平出集落を訪問していた。最高学年だけあって合宿時に何も課題が見つけれませんでした。はととも顔向けできないので下見の段階で現状を多少なりとも知っておきたいと考えた。

下見の段階で感じたことはこの集落で自分にできることが本当にあるのだろうかという不安だった。下見というだけあって、とくに個々に家を訪問はせずに道中に会った人に話をするといった簡単な交流しかできなかったが多少なりとも話を聞くことはできた。しかし限界集落全体に共通した問題の買い物弱者などの情報を得ることしかできなかった。もちろんこの問題も人を場所に集めるにあたって重要な要因となるが、交通手段が発達した現代では大きな要因とは言いがたい。その土地特有のもの、もしくは雇用する場を用意することができれば定住者を増やすことができるという基本的な知識をもとに集落内を見て回ったが下見では私にできることを発見することはできなかった。

合宿という二回目の訪問時には副区長である林さんに仲介にお願いいただき、より深く集落内の人たちと関わることができた。地域の中の歴史、当時の平出の様子、ダムに沈む前の平出など当時の写真を交えて平出の過去から現在までを深く知ることができた。これは合宿に参加した全員の感想と同じになると思う。下見に行った人側の感想として、現地の人たちが下見の時のことを覚えてくれていたことが何よりうれしかったと感じた。繰り返し訪問することが無意味ではないということが分かったのが今回の合宿の大きな収穫だ。

次回の9月の合宿では地域の行事の準備に参加させてもらえることになった。祭りに参加することなら現地に向かうだけでできるが、準備まで手伝えるのはこういった地域交流の場を介さないといけないだろう。地域の人間に受け入れてもらうという段階を踏めた私たちの次の課題は地域に溶け込むことだろう。この課題を意識して次の合宿に取り組みたい。

初めての地を訪れて

英語コース4年 古井戸進

「なんだ、みんな結構元気じゃん。」そんな印象が強く残った8月だった。過疎化が進む地域と聞いていたのでどうなるのか心配であったが、地域住民の皆様が楽しそうに過ごしている姿を見て驚かされた。それらはカネを使ったり、モノに触れたり、ヒトと話しをしながら見えてきたもので、どれも自分達の足で現地に赴かなければ分からないことばかりであったのでこの地に足を運んでよかったと強く感じる。

中でも平出集落の皆様が戸別訪問として聞き取り調査をしながら生活や地域の魅力を聞くことが出来たのはとても楽しく、笑顔で過ごす元気なエネルギーを肌で感じる事が出来たので本当に大きな収穫だったと感じている。現地の人々が何を考え何を楽しみに毎日過ごしているのか。これは実際に行ってみないと分からないことであり行っただけでは分からないことのように思えるので、そこを探るために「聞き取り調査」はとても有意義なものだと感じた。誰もが笑顔で楽しそうに話すその姿は自然とこちらも笑顔にさせられた。

また、集落の人達だけでなく藤原地区に関わる様々な人とも交流をもつことが出来た。みなかみをフィールドに活動をしている北山さんは一般社団法人や奥利根ネットワークなど様々な顔を持つ人で、話していると凄く機知に富んだ人だなと感じさせられた。多忙にもかかわらず夜遅くに宿に来て話をしてくれたことに感謝をしなくてはならない。このような「手」の人から多くの事を学び「土」の人を巻き込むことのできる「風」の人でありたいと感じた。

夏の初めに本格始動した藤原合宿は、宿をとることから始まり、車を借りたり出かける場所を決めたりとやる事は沢山あったがあまりスムーズに進まなかった気がする。それも行ってしまえなんとかなるもので、フィールドワーク中のメンバーは臨機応変かつ楽しんで活動をしていたと思う。こうして合宿が無事に終えることが出来た背景には、林明男さんの存在がある。今回の合宿の交流を全てコーディネートしてくれた明男さんには感謝の一言に尽きる。こうした元気な人がいるからこそ地域のよさを感じることが出来た。自分達の足で歩いた分以上の地域の元気に気づくことが出来たのではないだろうか。今後は地域のニーズを見つけだし、4回目の合宿を終える頃には変革を起こすきっかけを創っていればと思う。最後に、3日間活動を共にしたメンバーにも感謝を伝えたい。いつもありがとう。

寄り添い、助け合い

国際コース2年 五十嵐由衣

私は、今回の合宿場所が決定するまで平出地区という場所の名前は見たことも聞いたこともなかった。しかし、終わってみれば今まで知らなかった事が勿体なく思える程、とても素敵な場所であった。

平出集落を訪れて、最初に感じたのは「自然」だった。どこを見ても緑が目飛び込んでくる。事前に教えて頂いていた通り、数えるほどしか家はない。一目見ただけで「過疎」だと理解できる光景だった。その地で最初に林明男さんのお宅にお邪魔し、平出地区の貴重な資料を見せて頂いた。明男さんのお父さんは熱心な郷土史の研究者で、明男さんはお父さんの集めた大量の資料や、村の歴史や文化を記した本を誇らしげに見せてくれた。最終日まで明男さんには大変お世話になったが、本当にお父さんを尊敬し、その功績を次の世代に残そうとして、私たちに力を貸してくださっているのだと感じた。今回の合宿では、その思いに答えられたとは思えないが、これから回を重ねていく事でその思いに寄り添えるような存在になれたらと考えている。

二日目に行った戸別訪問では、82歳のMさんのお話を聞いた。彼女は毎日野菜の世話と家事を一人で行っている。「この地区のいい所はなんですか？」と聞くと「小さな所だから、人付き合いが穏やかでいい」と笑顔で話して下さった。そんな和やかなご近所付き合いを代表するエピソードがある。Mさんは水田も持っているが、とてもじゃないがお年寄りの女性一人で管理はできない。そこで明男さんが水田の管理を買って出ているそうだ。苗だけ用意しておけば、田植えから精米まで、毎年全て引き受けてくれているという。明男さんはMさんだけでなく、他の人の水田の管理も手伝っているそうだ。私はこの話を聞いて心底驚いた。それと同時に、たった3日間の滞在の私たちでさえ親身になって助けてくださる明男さんの姿勢に、納得もしたのだ。

今回の合宿では、住民同士で寄り添い助け合う姿をたくさん見ることが出来た。失礼な話だが、私は勝手に過疎地域は問題だらけで困り果てていると思っていた。しかし実際には、もちろん問題はあるがその中でも住民は上手に助け合い、暮らしていたのである。私達に出来る事は、そのサイクルの邪魔をしないように問題点解決のお手伝いをすることではないのか、と考えた。その一歩として、次回合宿ではより住民に寄り添えるよう、努力したい。

ココにしかできないこと

国際コース2年 井野明日香

「彼らおじいちゃんおばあちゃんの孫になる」、これが今回の私の目的だった。大袈裟かもしれないが、まずはそうすることで少しでも私たちのことを興味を持ってもらい、短期間でも身近な存在になることが出来ると思ったからである。ただ行くだけでは面白くない、何も始まらないと思い私は2つのことを提案した。1つ目は合宿に参加するメンバーに「名札」を用意したことである。名札といっても堅苦しいものではなく「チューリップ型」といった一見幼稚に見えるがこれは平出集落の戸別訪問の際に興味を示すという効果があった。初対面で名前を覚えてもらうことはとても難しいことだが形はともあれ私たちの活動や存在に関心をもってもらえたらこの合宿の意義はあると思う。2つ目は「手紙」を書くことである。これはお世話になった方たちへのお礼の手紙である。手紙を書こう、そう思ったきっかけは以下の実体験からである。自分が幼い頃、曾祖母に宛てた手紙と似顔絵をあげた時に嬉しそうな顔でそれを受け取り、部屋にいつまでも飾り大切にしてくれていたというエピソードである。10年以上も前のことだが今でも記憶として残っているということは、自分自身もきっと同じくらい嬉しかったのだろう。そんな思い出が想いとして形にすることができ、また役に立つことが出来て良かった。手紙を受け取った方たちは皆、一瞬驚いていたがすぐに笑顔になり嬉しそうな顔で「ありがとう、またおいで。」と言って下さった。そのことが私にとって何よりも嬉しかった。

そんな中で忘れられないエピソードが2つある。

1つ目は2日目の午後に行った平出集落での戸別訪問で出会ったKさんとのことである。Kさんは80歳と高齢にも関わらず毎日農作業をやっているほど元気なおばあちゃんであった。なんといっても声をかけた時は小豆を手慣れた様子でいじっていたのだから。彼女からは地域の良さや困ったことを中心に聞いたが1番ショックだったことは息子が藤原地区をでてみなかみ町で職に就いたという話の中で「ココには夢がないからねえ」と言ったことである。現実問題、このことは納得せざるを得ないが、正直この言葉には悲しかった。そんな思いの言葉を覆すためにも地域の良さに気づいてもらうといった小さなことでも外側である私たちなりの努力をしていきたいと強く感じた。

2つ目はN君とのことである。彼は2日目の前夜祭で屋台のお手伝いをしていた藤原地区出身の少年である。忙しいながらも快く話をしてくれた。彼は中学時に「藤原学」という藤原地区について学ぶ授業を受けており、この地区の良いところも悪いところも把握していた。小・中学校と少人数で授業を受け高校に入学し大人数という周りの環境が変わった現在の心境や違いを聞くと「少人数は先生・生徒との距離が近くて（授業時に）助かった」、「大人数は様々な人がいるため刺激的で面白い」と言っていた。彼は若いながらも自分の地域や環境を良く理解していた。また地元が置かれている状況を話している時、複雑そうな表情を見せていたが最後には「自分は、卒業後、外（県外）に出てしまうかもしれないが、いつかは戻って来て貢献できたらいいな。」と笑顔で答えてくれた。私はその言葉に感服し、今でもあの頼もしい姿を忘れられない。

このように、この3日間は、本当に数多くの方たちと出逢いお話を聞いた。普段の生活ならば決して関わる事が出来ない人や体験を共愛COCOを通してすることが出来たことは大変有難いと感じる同時に、改めてこの活動に誇りを持ちたいと思った。

合宿中は常に「何が出来るのか」を意識して活動していたが、それと同じくらい「彼らの孫」という気持ちでヒト・チイキに接していた。これがどこまで生かせるのかは分からないが共愛COCO（ココ）という活動を通して今回ならば

過疎地域（ココ）の立場になって初めて見えてくるものがあった。それは地域の方たちの嬉しいことや困っていることなど生の声を聞くことが出来たこと、過疎地域、田舎の良さを肌で感じる事が出来たことである。地域の方たちと親密な関係を築き、私たちがその地域の良さや問題点に気づき、彼らに気づかせる、そういったお互いに有益なものを受け与えることが出来れば良いなと現在、1番感じる事である。

最後に私たち共愛COCOを温かく迎えて下さった方たちに心から感謝を申し上げたく、次回合宿も含めて「ありがとう」そして「これからもよろしく願います」と述べたい。

訪問先で感じたこと

心理・人間文化コース2年 大森 正也

はじめは運転しながらこちらに向かうまでの間、現地であまり歓迎されなかったらどうしようと不安になったが、余所者である私たちを平出集落に住む林さんをはじめとした現地の人達は皆優しく、暖かく迎えてくれた。そして林さんのお話を伺い、集落の案内をしていただいた。その二つを通して見つけたことだが、この集落の人々は昔あったものや文化を大事にしながら暮らしている、ということである。林さんの父である方は、平出の文化を残すため二十数年かけて活動を行っていたらしく、平出集落の昔の情報を見聞きすることができた。それ以外にも集落のあちこちにそれを示すようなものがあったりなど、とても興味深かった。個人的にだが非常に満足の出来るものだったと思う。

私は今回のフィールドワークを通しての正直に言ってしまうと私が学べたこと・見つけられた課題は少なく、一日目だけの参加ということもあり、どちらかというと下見感覚であったことが否めない。それでも現地との交流は、私にとってはかけがえのない経験になったと思う。

訪問先で感じたこと

国際コース2年 笠原瑠依

今回の合宿は3日間という短い期間ではあったが、多くの文化や歴史に触れ、多くの人と交流を深めることができた非常に充実した3日間であった。

平出集落の文化や歴史については、集落に住んでいらっしゃる林明男さんに教えていただいた。集落を案内していただきながら、藤原ダムが完成する前の様子や完成後の集落の様子、さらには平出集落の農業やその地にまつわる神様についてまで、幅広く説明して下さった。小さな集落でもその地に受け継がれてきた大切な歴史や文化があり、集落の方々はそのらを大切にしながら暮らしているのだと感心したことを覚えている。

また交流については、集落の方々だけでなくみなかみ町で地域活性化運動を行っている方ともお話しすることができ、良い経験になったと思う。集落の方々も、突然訪問した私たちを快く迎えて下さった。私は集落に1人で住んでいる、Nさんという女性のお宅に訪問した。Nさんは「話せることなんてないよ」と言いながらも、私たちの質問にひとつひとつ丁寧に答えてくださり、さらにはNさんの畑で採れたトウモロコシをごちそうして下さった。お話をしている最中のNさんはとても楽しそうで、人の優しさや温かさに触れることができ、心地よささえも感じることもできた気がする。訪問は3つのチームに分かれて行き、それぞれ別のお宅に訪問しお話を伺った。自分が訪問したお宅以外のお話を聞いて、当然ながらも家庭ごとに全く異なったストーリーや環境があり、興味深いと思った。それぞれのお宅の話聞いた上で平出集落について改めて考えてみると、新しい発見や考えが生まれてくる。例えば、私が訪問したNさんは、集落の方はほとんどバスを利用しないというが、ではどのようにして食料や生活必需品を確保しているのか。これについては別のチームが訪問したお宅のように、息子や娘が買い物に連れて行ってくれるという家庭が半数だという。このように、自分の調査結果と他のチームの調査結果を組み合わせると新しい考えが生まれ出せるというのはおもしろいと感じた。

自分たちで、宿の予約からレンタカーの手配まで行って合宿をつくっていくということは初めての経験だったため、至らないところもあったと思う。しかしそれでも、平出集落の林明男さんを始めとする多くの方々の支援のおかげで、収穫のある充実した合宿になったと感じている。たった3日間という短い期間ではあったが、最終日に集落の方々へ挨拶に回ったときには、まるで自分の故郷のような心地よさを感じた。今回の合宿でつくり上げた「つながり」を大切に、今後に繋げていきたい。

感想

国際コース2年 加藤七彩

合宿の三日間は私にとってとても楽しく充実した三日間であった。市街地では体験できない自然や人々との触れ合いが、私の町おこしやボランティアに対する意欲を刺激した。

平出集落には、さまざまな野菜が育てられているが、そのほとんどがサルの被害に遭っている。住民は育てられている野菜がサルに食べられてしまう前に、急いで収穫をしなければならないのである。そしてその収穫した大切な野菜を会ったばかりの私たちに振る舞ってくれた。平出集落に住むおばあちゃんたちが丹精込めて作った野菜はとてもおいしかった。、特にとうもろこしは格別においしかった。サルが持って行ってしまう理由がわかる。私たちは初日、サルの集団を目撃した。10匹くらいの集団でとうもろこしを私たちの前で堂々と取って行った。私たちにとって、サルは動物園くらいでしか見たことがない。「サルだ！サルだ！」とはしゃいで、写真を撮ったりした。しかし、実はこれは住民にとっては深刻な問題で、被害は大きい。これは、その地域に実際に行ってみないとわからなかったことである。

平出集落の住民は訪問者に優しく、いろいろなことを教えてくれた。住人のほとんどは80歳以上のお年寄りだったので、若いころのお話やダムのこと、現在の生活についてまで、尋ねたことはなんでも答えてくれた。水田を持っているというMさんは82歳だ。82歳のおばあちゃんには管理は大変なのではないか、と尋ねると実は管理は明男さんがほとんどすべて行っているというのだ。明男さんは、今回の合宿で集落やダムの歴史を教えてくれるなど、私たちもとてもお世話になっている方である。明男さんはほかにも何人かの水田の管理を手伝っているという。Mさんは、明男さんはこの村にとって必要不可欠な存在で頼りにしている、と言う。しかし、明男さんもMさんよりは若いとはいえ、おじいちゃんである。たくさんの仕事を請け負うことは大変らしい。そこで、私たちに何かできることはないだろうか。明男さんのお手伝いができれば、平出集落に貢献することができるし、何か町おこしのヒントが見つかるかもしれない。

平出集落の自然や人々との触れ合いは、私の心を大きく揺さぶるものであった。こんな綺麗でどかな土地を守りたいと感じた。また、9月に合宿があるが、そこでは自分たちにはどんなことができるだろう、と模索しながら過ごすことを目標にしたい。

6. 会計

第1回藤原合宿会計報告

2015年8月20～23日

| 収入 | | | 支出 | | |
|------|------------|----------|----------|-----------|------|
| 8/10 | 奥山先生より費用受取 | ¥140,000 | ¥716 | スケッチブック×2 | 8/20 |
| | | | ¥98 | ノート | 8/20 |
| | | | ¥35,640 | レンタカー代 | 8/21 |
| | | | ¥1,200 | 高速道路料金 | 8/21 |
| | | | ¥800 | 温泉入浴料金 | 8/22 |
| | | | ¥60,000 | 宿泊料金 | 8/23 |
| | | | ¥920 | 高速道路料金 | 8/23 |
| | | | ¥3,742 | ガソリン代金 | 8/23 |
| 合計 | | ¥140,000 | ¥103,116 | | 合計 |

| 支出合計金額 | その他費用合計 | 予算差し引き金額 | 予算相残高 |
|----------|---------|----------|----------|
| ¥103,116 | ¥0 | ¥36,884 | ¥394,884 |

2015年8月29日(土)

会計担当：国際2年 井野明日香

7. 頂きものの報告

◆8月21日

みなかみ町役場 様

林 明男 様

清水 先生

れ

10周年記念 みなかみ 18湯×泉極志Tシャツ

10周年記念 みなかみ 18湯×泉極志うちわ

書籍 「新装版奥利根 おれのむら くらしとまつり」

絵葉書「幕末の農家 仙太郎やかた」

お菓子の差し入



◆8月22日

林 明男 様

古俣 肖子 様

宝川温泉入浴無料券

昼食時 採れたて野菜のサービス



8. 添付資料

～戸別訪問時のインタビューメモ～

Kさん 80歳 新潟出身

村のいいところは景色がいいところだが、今住んでいる位置より昔の家があった場所のほうが景色はよかった。困っていることは強いて言うなら鳥獣被害。サルが持って行っちゃう。雪かきも困る。村の中で10人ほどで「ちとせ会」というものをつくって市からの職員を月一で呼んで体操とかしている。毎日やっていることは農業、土いじり。買い物は息子さんに買ってきてもらう、ときどき自分も連れて行ってもらう。村に欲しいものはとくになし、病院とかは困ったりするけど送迎もくる。

Mさん 82歳 群馬後閑町、茂呂

村人全員と仲がいい、助け合っている。
茂呂も藤原地区みたいな田舎。
買い物は一昨年まで訪問販売にお願いしていた。藤原の中にお店が2つあった。
大変なことは雪かき、でも一家に一台除雪機持っている。屋根の雪は構造的にみんな落っこちてくるから心配なし。少し前にオフロードが廃止されちゃったから情報伝達が不便になった。他の町の人に情報を教えてもらって初めて知るなんてことも。
村の中の人は高齢者ぞろい。
病院は送迎が来るからそこまで困ってない。
息子夫婦が週一ぐらいで買い物に連れて行ってくれる。
野菜を自給自足しているので買ったりはしない。
普段は午前中畑仕事して、あとはごろごろしている。
若い人はウェルカムしてる。
米も作ってるけど、明夫さんが刈り取り全部やってくれちゃうみたい。頼っちゃう。
明夫さんが村のリーダーみたいだ。
サル困る。

息子は人がいい。

Nさん 94歳

24歳で現在の住居に。戦争中に疎開することになり、湖の底から本来空き家だった現在のお家に上がってきた。息子何十年前に出てって、旦那さんと二人暮らし。その旦那さんも数年前に亡くなったので現在は一人暮らし。買い物は週一で買ってきてくれる。そこまで村から出る行為もしない。足が不自由なのでバスも乗れない。医者を送迎は足場低くしてくれるから助かる。

人付き合いは誰とでもしゃべれるので苦労はしていない。昔は村の集まりにも参加していたけど今はそうでもない。自分の家の畑を持っていて、週一で息子が手伝いに来てくれる。自分用じゃなく息子孫のために作っている。それが生きがいになっている。

サルの被害が10年前から続いている。困る。明夫さんが動物愛護精神を前面に出されてるのがさらに困る。娘もいるけど埼玉にいるからたまにしか会えない。

子どもが4人、孫がわからん、ひ孫が5人。

困ってることは買い物の不自由が強い。自分の目で確かめて買い物がしたい。

自分の住んでいる地域にそこまで思い入れはない。

情報源は特になし。回覧板よまない。テレビつけない。新聞とらない。まず必要としてない感じ。